誇り高き星へ

藤川桂介

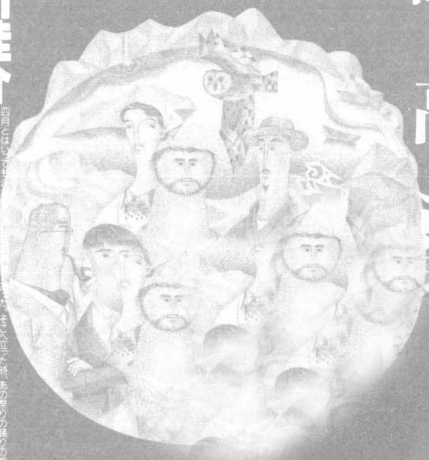
四月とはいってもまだ春の遠い阿寒湖であった。ふと、入ってた時、あの祭りの踊りの輪の内にいた穢れを知らない優しさをたたえた一人の少女の姿が、アイヌの人々の歌声と共に甦ってきた。額に巻いていた幅広の美しいマタンプシの端には、「Kei」という刺繍がしてあった。その少女のあまりにも初々しい美しさに見惚れながら、「誇り高き星へ」が一気にまとまっていった。高山柊子の誕生であった。「遊星プホロ」の二人については、かねてからまったく別の作品にするつもりで、大分前からストーリーと共にノートの内で出番を待っていたものであった。このまったく異質と思われる物語が、今回互いに反発しながら融和して、不思議な効果を上げたのには私自身びっくりした。

誇り高き星へ

藤川桂介

四月とはいえ北国の夜の冷気は、そこへ入ったとたん、肌あの影の中の闇の輪郭の中にいた横たわる知られぬ美しさを、ただ、ただ二人の少女の姿が、ガイスの人々の歌声と共に、絶えずそこに横たわっていた。その少女のまわりにも初々しい美しさに見ゆれなかった。清らかな星へ、かすかに気高き、

仕事を待っていたものであった。この夜まったく異質な思われる物語が、今回初めて公表しなかった別の作品にする。もちろん、大分前からストーリーを共にノートの内で



誇り高き星へ

一九八九年二月二十日　初版発行

著　者　藤川桂介
発行者　角川春樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　営業部〇三―八一七―八五二一
編集部〇三―八一七―八四五一
振替口座　東京三―一九五二〇八　〒一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan
ISBN4-04-872527-0 C0093

目次

第一章　奇妙な来訪者　5
第二章　遊星ブホロの危機　39
第三章　イコマンテの夜　89
第四章　十二の秘文字　139
第五章　コタン消滅　171
第六章　誇り高き星へ　206
あとがき　241

装丁　戸田ツトム
装画　宍戸　明

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

誇り高き星へ

第一章　奇妙な来訪者

1

「兄ちゃん、聞いてよ。とうとう凄いものを見ちゃったわ」
勤めから帰った柊子は、ダイニング・キッチンと座敷の境へ立ったまま、着替えもせずに話しかけていた。
「それが今までのとは比べものにならないほど大きくてね、搭乗員まで見えたのよ」
まだその時の興奮はおさまりそうにない。
いや、むしろ話しながらその時の光景をあらためて思い出すのか、ますます高ぶっていくようであった。
「二人いたのよ。黒っぽいゴーグル風のものをつけて。こちらを向いていたわ。あとはぼんやりしていたけれど、間違いなくあれはコックピットだったわ」
一人語りはまだまだつづきそうである。

それは今日の退社間際の出来事だった。
柊子は化粧室へ入って髪の乱れなどを整えていたのだが、その窓から夕景を見つめたのだ。
オフィスは中央線沿線の飯田橋に近い高台にあったので、ネオンに灯が入っていく街を見下ろしていると、一瞬夢見心地になることがある。
いわゆる昼と夜の境界にある黄昏が、妙にファンタジックに見えてくるからだ。
〈何かが起こりそう〉
視界に広がる都会のパノラマは、一種のフェアリイ・ランドに変わっていく。
柊子はもう二十歳になろうというのに、そんな童話めいた時を楽しんでいることがよくあるのだ。
「こんなところで、何をぼんやりしているの？」
同僚からからかわれたこともたびたびあって、柊子は変わり者のようにいわれたりすることがあるくらいなのだ。
もちろん彼女は、いわれるような変人でも何でもない。明るくて素直で、仕事もてきぱきとこなすほうで評判はすこぶるいい子である。
もし変わったところを探そうとするなら、化粧室の窓からぼんやりと黄昏を見つめていることがよくあるといったことぐらいだろう。
その日もいつものように、

〈何かが起こりそう〉
不安と期待を交錯させながら、化粧室の窓から夜景を見つめていたのである。
柊子のその予感のようなものは、よく適中する。
他人にはいったことがないのだが、不思議な勘が働くのだ。
〈あっ、あれは!?〉
夜の暗黒の空から、地上の薄暮に向かって光るものが一気に降下して来たのだ。
〈いつものだ〉
胸の動悸がにわかに高まっていた。
そのうちそれは、右へ左へ、上へ下へと、直線的に激しく動いて姿を消していくに違いない。
これまではほとんどそうして消滅していったからである。
しかし今日はちょっと様子が違っていた。
その一点の光は、柊子の目の前でみるみるうちに膨脹していって、柊子の目には縦五十センチ、横二メートルほどになっていったのである。
もう夢見心地ではなくなっていた。
胸が激しく波打ち、顔はかっと熱くなっていた。
次の瞬間、それは急角度で向きを変えて来たのである。
〈あっ〉

透明なフロントグラスの向うに、二名の宇宙服風のものを着た男達――、柊子にはそう見えたのだが、もしそういっては正確でないとしたら、二名の生命体といっておこう。くびれのない黒いゴーグルをかけたそれらの生命体が、こちらを見て立っているのだ。柊子の目はそれへ張りついたように動かなくなってしまっていた。

〈あなたは誰!?〉

思わず心の声を張り上げていたが、その他の思考は完全に停止してしまっていた。いったいそれからどれくらいの時間がたったのか判らない。

宇宙船は鋭角的に方向を変えたと思うと、一瞬のうちに移動して、薄暮の妖しい光の内へにじむようにして姿を消してしまったのだった。

その時の光景を思い浮かべて、柊子は話し終っても恍惚とした表情で酔っていた。

「それがどうしたんだ」

彫刻をする槌音を響かせながら、兄は無感動に訊いてきた。

「神よ」

「馬鹿なこというな」

「ううん、きっとそうよ。とうとうカムイはあたしと接触を取るために姿を見せたんだわ。兄ちゃんも、そう思うでしょう」

「――――」

「宇宙へ帰ってしまったカムイは、やっぱりアイヌの人々の行方を見守ってくれている

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

んだわ」
「いい加減にしろよ」
「兄ちゃんこそ、アイヌの人の心を取りもどすべきよ。見ようとしない者には見えないと思うわ」
「――――」
「兄ちゃんのように、無理にアイヌの人であることを拒否しようとしていると見えないのよ。UFOはカムイの船だと思いつづけてきたけど、やっぱり本当だったわ」
襖に寄りかかったまま、まだその衝撃的な感動からさめそうにない。
「そんなこと、人に喋ったりしないだろうな」
木屑に埋れながら、兄はうとましげにいった。
「そんなこと、気にすることないじゃない。どうせ信じるわけがないんだから」
「いいな。絶対にいうんじゃないぞ」
「判ってるわよ。集落の人にだって、誰にもいわないようにしているじゃない」
「判っていればいいんだ」
兄はあくまでも無表情に、突き放すようにいいつづけた。
いつものことであった。
かつてない経験をしたというのに、まったく興味を示そうとしないばかりか、その感動に水をさすようなことをいう。

実直でぶっきらぼうだが、やさしいところがあって好きな兄である。しかしこういう時ばかりはこの世で一番嫌いな人に変わってしまうのだ。

柊子はいささかしらけた気持になりながら、片方へ寄せてある襖を押しあけて座敷へ入った。

兄はすぐに作業をやめて台所へ立って行く。

これは二人の暗黙の決めごとであった。

柊子が着替えをする時、必ずそうするのである。

八畳間を半分に仕切って使っているので、いつの間にか身についた習慣であった。

兄は薬缶をガスへかけている。

「ほかほか、買って来たわよ。大盛りにしてもらって」

「うむ」

億劫そうに答えると、テーブルの上に置かれた包みから、夕食の弁当をつかみ出し、冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出していた。

「ほかほかの小父さんたら、彼のだなって、変な目で見るの」

「フッ」

「だからサービスしてっていっちゃった」

思いきり気分を変えていった。

しかし兄の不機嫌はいっこうに晴れそうになかった。

「深入りするんじゃないぞ」
「え？」
「管理人も興味持ってるからな、俺達のこと」
「別にいいじゃない」
「庭で材料の整理をしてたら、あんた沖縄の人かねなんていいやがる」
「――――」
「ああそうだって答えてやった」
「放っておきなよ」
「倭人のいうことは判らねえ」
「もう無理するのよしたら？」
「――――？」
「無理してシャモになろうとしたって、なれるわけがないじゃない」
「まずはまぎれこむことだ。すべてはそれからだ」
しかし兄の意図していることは、何一つ希望がなかった。
アイヌの人であることから脱けようとすればするほど、苦渋をなめさせられることが多かったのだ。
多少でもその抵抗を柔らげてくれるものがあるとしたら、それは柊子が一緒にいてくれるお陰である。

彼はいかつい体に、太い眉と彫りの深い目を持っている上に、胸毛が見えていて、ちょっと変わった雰囲気を漂わせていたが、ことさらそれに気づかれずにすんできたのは、柊子のお陰だった。

柊子は別に美少女というわけではなかったが、色白で、ちょっと下り眉なのが、まだすれていない少女の雰囲気を漂わせていて、誰からも好かれた。

近ごろの若者言葉で「おばん」といわれる二十歳になろうとしているのに、まだ恥らいさえ残していて、いつもその顔には笑みがある。

今時珍しく控えめで、年長者に接する態度は、かたくななまでに謙虚であったが、これはアイヌ・コタンで自然に身につけてきたものに違いない。

「もうそろそろ忘れろよ、弟子屈のことは」

荒っぽいしぐさでビールを飲みながら、兄がいった。

「どうして？」

「俺達は故郷を捨てて来たんだからな。そろそろアイヌの殻は脱ぎ捨てたほうがいい」

「兄ちゃん、本気でいってるの？」

「冗談でコタンが脱け出せるか」

「あたしは弟子屈を捨てないわ。いつか帰るつもりだもん」

「チッ」

兄はますます不快そうになっていた。

弟子屈というのは屈斜路湖畔の町で二人の故郷である。そしてそこにあるアイヌの人々のコタンを、一般に屈斜路アイヌ・コタンといっている。

「やっぱりコタンがいいわ。どうしても東京には馴染めそうもないもん」

「判んねえな、お前は。馴染めるか馴染めないかなんていう問題じゃないんだぜ」

兄は苦々しげに舌打ちすると、苛立たしそうに残りのビールを一気に飲みほしている。

「少しは変わるかと思ったけど、全然変わらないのね」

「決心して出て来たんだ。当り前だろう」

「馬鹿ね。どうやったって、あたし達はアイヌの人であることを消せないっていうのに」

柊子は着替えをすませると、そそくさとガス台のところへ行ってお茶を容れ始めた。

もうすでに兄のほうは、待ちきれないといった様子で、腹立ちまぎれに弁当をつっついていた。

「兄ちゃん、変よ。いくらコタンから脱け出したいっていっても、UFOを見ることまでやめることは出来ないわよ。見ちゃうんだもん」

「見ようと思うからだ。見ないと思えば見ない。決心が足りないんだ」

「ふふふ。どうしてそうこだわるのかな。いいじゃない、他人にいうわけじゃないんだから」

「そんなことといっているから、いつまでも吹っきれないんだ」

「兄ちゃんこそ、無理してるのよ」
柊子はお茶を容れて持って来ると、兄と差し向いに座って弁当を広げた。
二人のいさかいが始まるのは、いつも柊子のＵＦＯ目撃談からで、普段は仲の良い兄妹も、この時は激しく対立してしまう。
その原因が何なのかということは、二人共充分すぎるくらいに知っていた。
日本の北の果て、屈斜路のアイヌ・コタン――、それは消し去り難い重圧としてのしかかりつづけていたのである。
なぜ――。
それはとてもひと言ではいい表わせないほど長い時の重みを持ち、その分だけ複雑であり、根の深いものがあった。
坂上田村麻呂の蝦夷征伐から始まったともいえるのだが、それは彼等の勢力の一つの頂点を象徴しているのであって始まりではない。
さかのぼれば「古事記」において、佐渡島は蝦夷の支配下にあったという理由から、神の名を与えられていないのだ。
それはとりもなおさず、彼等が陸奥に拠点を持ち、その勢力はしだいに大きな力を持ちつつあったということを意味しているにすぎない。
時の大和朝廷は、その風俗の違う勢力を気にしながらも、自らの権力基盤を固めるのに必死で、彼等を一掃する余裕はなかったのだ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc